

日本の首相 岸田文雄
中国の首相は？

習 近平 (しゅう きんぺい、シー・チンピン)

この名前は中国では、シー・チンピンと発音します。

金 大中 (キム・デジュン、日本語読み；きん だいちゅう、朝鮮語: 김대중)
同じ漢字ですが、よみかたって全然違うのですね。

「南無阿弥陀仏」は？

中国のよみかたも韓国(朝鮮)のよみかたも、私たち普段発音している「なむあみだぶつ」とほとんど変わりません。

インドで生まれた仏教が中国に伝えられて行くときに、中国の僧侶の方々が音写(おんしゃ:そのように発音する文字をあてる)されました。

ですから、「なむあみだぶつ」という発音は、もちろん多少の違いはありますが、仏教が生まれたインドから、私たちの日本までつながっているのです。

インドの挨拶はお互いが合掌をして、「ナマステ」と言います。

この言葉は古代インド語の一つ、サンスクリット語に語源を持ち、永い永い年月を経た現代でも、インドの人々の挨拶として変わらずに語り継がれています。

「ナマス」は敬う、「テ」は貴方。「私はあなたを敬います」「あなたに出会えて光栄です」など、たくさんの意味がこの言葉には込められてあるそうです。

この「ナマステ」と、私たちのお名号「南無阿弥陀仏」も、その言葉の語源は同じなのです。

「南無」とは、サンスクリット語のこの「ナマス」の音が、中国に伝わって漢字に音写された語で、元来の「帰依する」、「敬う」などの意味を持ちます。

また「阿弥陀仏」という語も同じくサンスクリット語の「アミターバ」「アミターユス」が漢字に写されたものです。

アミターバは「量はかりしれない光を持つ者」、アミターユスは「量りしれない寿命を持つ者」のです。

「ミタ」というのは量る事が出来たという意味ですね。

それがヨーロッパに伝わって、ヨーロッパのメーターという言葉の先祖になります。

この「ミタ」に、インドの言葉では、最初に「ア」という接頭辞がつくと、意味が逆転します。

「アミタ」というと、量ることのできない。

つまりは、お念仏は「阿弥陀仏に帰依する」ということなのです。

私たちは、「国」や「民族」などで壁を作りがちですが、「なむあみだぶつ」はその壁を超えて、いろんな時代にいろんな人たちの中で輝いていたのです。

「あみだぶつ」とは、訳せば、「かぎりないひかり」です。

かぎりないひかりですから、分け隔てがありません。

いつでも、どこでも、だれでもそのひかりは等しく照らしてくれます。

今年も法和会が始まりました。

私たちも、わけへだてないあみだ様のおこころを仰ぎ、「なむあみだぶつ」のお念仏のいわれを訪ねながら、今年も歩いていきましょう。

野球日本代表「侍ジャパン」が、第5回「ワールド・ベースボール・クラシック (WBC)」の決勝戦で米国に3-2で勝利しました。

球場もすごい歓声ですが、テレビやネットでどれだけの方が応援しているのか？

あたためて「応援」で何なのか考えてみました。

ある方がアスリートに、「応援によって何が変わる？」とアンケートを取ったことがあるそうです。ほとんどのアスリートが、「マイナスの感情から脱却できる」と答えたのだとか。

またある団体は検証したところ、「観客に応援されることで選手の運動量が約 20%アップ」することがわかったそうです。

言葉というのは、人を動かす原動力でもあるのですね。

以前、浄土真宗門徒のヨシエさんという方が、ご自身の生い立ちの話を聞かせてくださいました。

ヨシエさんは小学校2年生の時、両親が離婚をし、二人兄妹であったヨシエさんと兄さんは父親の元に引き取られました。まだまだ甘えたい盛りのヨシエさんにとって、それはとても辛く悲しい出来事だったそうです。

それから2年後、ヨシエさんが4年生の時に新しいお母さんが家にやってきました。

新しいお母さんはいつも「ヨシエちゃん、ヨシエちゃん」と気にかけてくれたけれど、ヨシエさんは生き別れたお母さんへの思いが強く、新しいお母さんをどうしても「お母さん」と呼ぶことができず、他人行儀に名前と呼んでいました。

同じ苦しみを味わった唯一の理解者である兄の存在だけがヨシエさんの心の支えでした。

ところがある日、その兄さんが学校から帰ってくるなり、あまりに自然に「お母さん、ただいま」と言っていたのをヨシエさんは聞いてしまったのです。お母さんも「〇〇ちゃん、おかえり」と明るい声で言っていて、それはどこからどう見ても“家族”でした。

「ああ、この家で私は一人ぼっちなんだ」と思ったヨシエさんはその日以来、家の中に自分の居場所を見つけられず、孤独な青春時代を過ごしたそうです。

高校を卒業して就職をし、やがて結婚し、子どもを授かりました。仕事や子育てを理由に、実家から遠のいていきました。

「母さんが危篤やから、最期に立ち会ってやってくれんか」

兄さんから連絡があり、ヨシエさんは病院に向かいました。久しぶりに会ったお母さんは真っ白な髪のおばあさんになっていました。お母さんが家にやってきてから50年以上もの年月が経っていました。

お母さんは意識が朦朧とする中で、ボソボソと何かうわごとを言っていました。何を言っているんだろう、とお母さんの口元に耳を近づけてみると、なんと、「ヨシエちゃん、ヨシエちゃん」と、自分の名を呼んでいたのです。

「お母さん、私、ここにおるよ！」とヨシエさんはお母さんの手をぎゅっと握りました。

それから間もなく、お母さんは亡くなりました。

晩年、お母さんは認知症を患い、色々なことを忘れていったけれど、「ヨシエちゃん」という名前だけは忘れなかったと兄さんから聞きました。

お通夜、お葬式が終わり、火葬の後、お母さんのお骨が入った小さな骨壺を抱いた時、ポロポロと涙が溢れてきて

「お母さん、お母さん、お母さん、お母さん、お母さん…」と、まるで少女のように声をあげて泣いたそうです。

ヨシエさんはその話の最後にこうおっしゃいました。

「私は母に背を向け続けた親不孝娘でした。でも母はそんな私の背中に向かって50年以上も、「ヨシエちゃん、ヨシエちゃん」と呼び続けてくれていたんです。もっと早く、「お母さん」と呼んであげたかったけれど…、でも最後に「お母さん」と呼べて…嬉しかった。母はずっと前から、私の母親だったんです。」と、そう話すヨシエさんの目から涙がこぼれました。

「お母さん」と呼ぶその一声に50年以上もの孤独が癒やされていく、言葉とは時にそんな力を持つものなのだと聞かせていただきました。

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり

「帰命無量寿如来～」からはじまる正信偈を拝読していると、「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」

と出てきます。

これは「阿弥陀さまが悟りを開いて仏さまになられたのは、今から十劫も前のことでした」という意味です。

いやいや、十劫ってなんですか！って話ですが、十劫とは時間の長さを表す言葉です。

十劫とは一劫の10倍ということですが、では一劫という時間はどれくらいの長さなのかをお経にはとんでもない例えで説明されています。

40里四方（縦・横・高さが160キロメートル）の巨大な岩があって、100年に一度だけ空から天女が舞い降りてきて、身につけているひらひらの羽衣の袂でサーッと一度だけその岩を撫でて天に帰っていくのです。

そしてまた100年後、天女が舞い降りてきて袂でサーッと岩を撫でていく、それを繰り返しているうちに袂の摩擦によって岩が少しずつ磨耗して行って、いつかその巨大な岩が一つなくなるまでの時間が一劫である、と言われるのです。

十劫はその10倍ですから、もはや計り知ることのできない遠い遠い昔に阿弥陀仏という仏さまが誕生したというのです。

阿弥陀さまは仏になる前に「私は生きとし生けるものを一人も漏らすことなく救う仏になります。もしそれができないのなら、私は仏にはなりません」という願いを起こされたと言われます。

永遠に生きとし生けるものを救い続ける手段として考え出されたのが“南無阿弥陀仏という言葉になる”ということだったのです。

阿弥陀さま自らが“南無阿弥陀仏”という言葉になって、「必ず救うから、大丈夫。安心なさい」と、その声があなたに届くまでずっと喚（よ）び続けよう、と十劫の昔に“南無阿弥陀仏”という言葉の仏さまになられたというのです。

その喚び声を十劫というとても長い時を経て、やっと今私はその喚び声を聞いたんです、というのが「いまに十劫をへたまへり」です。

仏教では、命はずっと続いているものだと考えます。

今私たちはたまたま人間として生を受けていますが、この命はずっと生まれ変わり死に変わりを繰り返してきて、いつ始まったか分からないくらい遠い昔から私は迷い続けてきた。

その間、阿弥陀さまはずーっと私のことを喚び続けていた、というのです。

なので親鸞聖人は「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」の一言に二つの意味を込めておられると思います。

一つは、「私は十劫もの間、阿弥陀さまに背を向けてきた」ということ。

そしてもう一つは、「阿弥陀さまは十劫もの間、私を喚び続けてくださった」ということです。

今私がただ一声、南無阿弥陀仏と称え、聞くということは同時に、私の命はずっとずっと願われていたのだと知らされることなのです。

「南無阿弥陀仏」と、私が称えるそのたった一声は、私が阿弥陀さまを呼ぶ声でありながら、それは同時に十劫もの間喚び続けてくださった阿弥陀さまの声でもあるのです。

永遠と言っても過言ではない遠い遠い昔から私たち一人ひとりが背負ってきた生命の孤独が、「南無阿弥陀仏」というたった一声によって溶かされ、癒やされていくのです。

私たちは言葉の世界に生きています。何も言葉を発さなくても、頭の中は言葉でいっぱいです。

その私たちを永遠に救い続けるために阿弥陀さまは「言葉になる」という選択をされたのです。

私たち人間は「言葉」によって物事を分別し、互いにくらべあって生きています。その先にあるのは、「苦しみ」です。

ですが、そうとわかっていながら、「言葉」の中でしか生きられないのもまた、人間です。

阿弥陀さまは「言葉」で苦しむ私たちのために、「言葉」の仏さまとなってくださったのでしょう。

浄土真宗は冥福を祈らない

「ご冥福をお祈りします」

この言葉はお葬式などの場面でよく耳にする言葉ですね。

ところが皆さまご存知でしょうか。

なんと、浄土真宗では「ご冥福をお祈りします」という言葉は使わないのです。

先に断っておくと、「ご冥福をお祈りします」という言葉・表現自体が間違っているわけではありませんし、この言葉を使ったからといって、相手に失礼になるとか、そういうことは一切ありません。

ではなぜ浄土真宗が冥福を祈らないのか、今日はここからうかがってみたいと思います。

まず、「冥福を祈る」とは「冥土での幸福を祈る」という意味です。

冥土というのはあの世のこと、死後の世界を意味しますが、その冥土の「冥」という字を漢字辞典で調べてみますと「くらいところ」という意味があるようです。

そして土という字は仏教では「世界」を意味しますので、冥土というのは「暗い世界」、もっと言えば、「どうなってしまうか分からない世界」のことを意味します。

つまり「冥福を祈る」とは、どうなってしまうか分からない世界に旅立たれた故人に対して、どうか幸せになってくれよと祈ることです。

けれど、浄土真宗というのは浄土に生まれていく教えです。

阿弥陀さまは全ての命をかならず浄土に生まれさせるとお立ち上がりくださった仏さまです。

その阿弥陀さまの手によって私たちの命は冥土ではなくて、浄土に生まれていく命であったと聞かせていただくのです。

じゃあ浄土って何？

「帰命無量寿如来～」ではじまる正信偈には浄土は「無量光明土」とであると表されます。

これは「量ることのできない光明の世界」という意味です。

先ほど、冥土とは暗い世界だと言いましたが、浄土はそうではなくて、限りない光の世界なのです。

これは一切の苦悩から離れた悟りの世界であることを意味します。

また、浄土は阿弥陀経に「極楽」と表されます。

極楽と聞くとどんな世界をイメージするでしょうか？

見たこともないようなご馳走やお酒が山ほどあって食べ放題、飲み放題（もちろん時間無制限）、体重も血糖値も尿酸値もコレステロールも何も気にしなくていい。

好きなことが好きなだけできて嫌なことは何もしなくてもいい…みたいな世界を 昔は想像していましたが、どうやらそうではなさそうなんです。

阿弥陀経に、極楽は「苦しみがなく、ただ楽だけがある世界」と示されています。

私たちが思い描く「楽」というのはほとんどが「苦」と背中合わせです。

苦楽一如（くらくいちにょ）」という言葉があります。

「苦楽一如」とは、お釈迦様の言葉と言われていて「苦しいことも楽しいことも、別々ではなく一つのものだ」という意味です。

「苦楽一如（くらくいちにょ）」と聞くと、ドラマ水戸黄門の主題歌

「人生楽ありゃ苦もあるさ。涙の後には虹も出る。歩いてゆくんだしっかりと。自分の道をふみしめて。」

を思い出します。

人生の中では「苦」だけがずっと続くことも「楽」だけがずっと続くこともありません。「苦」の後には「楽」が、「楽」の後には「苦」が待っている。

オリンピック2連覇を果たした体操の内村航平選手が、あるインタビューで「金メダルを獲ってからが地獄でした」と語っておられたのが印象に残っています。

私たちの願望が叶うことが本当の意味で楽なのかということそうではなく、それは新たな苦をもたらすものでもあるのです。

苦の延長線上に見出した楽というのは、結局苦から離れてはいないのです。

「苦あれば楽あり 楽あれば苦あり」とは、よく聞く言葉です。

これで思い出すのは、「アリとキリギリス」の話という方も多いかもしれませんね。

夏の間、遊んで暮らしていたキリギリス

片や懸命に働いていたアリ

夏が過ぎ冬になった時に

遊んでばかりいたキリギリスは食べ物もなく寒さにふるえ

働いていたアリは暖かい寝床と十分な食べ物を得て安楽に暮らした

非常に分かりやすい話です。

でも、世の中は、必ずしも頑張った人間が報われるとは限らず、怠けていた人がひどい目に遭うとは限りません。そこが、人生の一筋縄でいかないところでしょうか。

お経の中に、こんな話があります。

夜、ある独り身の男性の家の扉をたたく音がします。

不思議に思って扉を開けると、そこには絶世の美女が立っているではありませんか。

その上、その美女がこう言うのです。

「どうぞ、私を妻にしてください」

男が断るはずありません。

続けて美女は、

「実は私には妹が一人います。その妹も一緒にあなたの妻にしてほしいのです」

この美女の妹なら姉に劣らない美女に違いないと思った男は、この申し出を快諾します。

それならと美女が妹を招きいれますが、それは姉とは似ても似つかない醜い女性でした。

男があわてて断ると、美女は言うのです。

「私が昼なら妹は夜。一方が存在しなければ一方も存在できない。私たちは切っても切れないのです。妻にするなら二人一緒でなければ」と。

苦と楽も同じこと。それは、背中合せのように切り離せないものなのです。

また「苦」と思えたことが「楽」に転じたり、「楽」だったはずのことが、絶えがたい「苦」に変わったり…。

「苦」と「楽」を経験しなければならぬ人生は、全体でみればやはり「苦」といえるのではないのでしょうか。

楽しいこと、うれしいこと、つらいこと、悲しいこと、思い通りにならないと。決して一色だけではなく、色とりどりの糸で織り上げられているのが私たちの人生、生活というものです。

どのような織物であっても、それは他には代えられない私だけの、あなただけの作品です。

一年を振り返った時に、「いろいろあったけど、まあまあだったな」とか、「無事に年末を迎えられたよ」とか、「来年はもっと頑張るぞ」とか思えたら、それはいい一年だったと言えるのではないのでしょうか。

楽を求めて、苦に突き進んでいく生き方しかできないのが私たちであり、だからこそ救わねばならないと立ち上がられたのが阿弥陀さまなのです。

その阿弥陀さまの国、極楽には、そもそも苦しみがないと説かれます。

苦しみがなく、ただ楽だけがある世界。

苦しみがないんだからもはやそれを楽と呼ぶ必要さえもない、ただただ安心の世界とも言えるのかもしれない。

大きな大きな安心の中にいたなら、何も必要ないのです。

それはもはや、幸福を祈る必要さえもない世界であったと聞かせていただくのです。

マラソンで、ゴールした人に向かって「健闘を祈る」と言うのでしょうか。

「健闘を祈る」とは、これからスタートする人、一着になるか最下位になるか、はたまた最後まで走れるかどうか分からない人、健闘を祈る必要がある人に向けての言葉であるはずで。

まさに冥土とは、幸福を祈る必要がある世界なのです。

ところが浄土は命の終着点、ゴールです。

本当の楽が何たるかも分からずずっと苦楽の狭間を永遠の過去より迷い続けてきた命が、やっと還るべきところに還って往かれた、その方に対して幸福を祈る必要があるのでしょうか。

その別れは悲しいけれど、寂しいけれど、「お疲れさま。よく頑張ったね」と送り出していける世界が浄土なのです。

最初のテーマに戻りますが、なぜ浄土真宗で「ご冥福をお祈りします」という言葉を使わないのか。

それは、私たちは冥土ではなく、浄土に生まれて往くんだ。

そしてその浄土というのは、幸福を祈る必要もない安心の世界なんだと聞かせていただくからです。

冥福を祈る必要がないのが浄土なのです。

じゃあ「ご冥福をお祈りします」と言わないなら、何と云えばいいんだ、と気になるところですが、その前にもう一つ、阿弥陀経にある大切なお言葉を紹介せねばなりません。

それは「俱会一处」、「また会える」という言葉です。

阿弥陀さまは「必ず救う」という仏さまです。

「必ず」とは100パーセントです。100パーセントだから、「また会える」と聞かせていただけるのです。

もし阿弥陀さまが99.9パーセント救いますという仏さまだったら、「また会える……かもね」になってしまいます。

阿弥陀経で「また会える」と言い切ってくくださったのは、阿弥陀さまの浄土だからこそなのです。

では「ご冥福をお祈りします」と言わずに何と云えばいいか。

例えば

「お悔やみ申しあげます」

「哀悼の意を表します」

「またお浄土でお会いしましょう」

など、間柄によってお考えになられてもいいと思います。

南無阿弥陀仏 私の口から如来の願いがこぼれる

ところで、お念仏は私が称え、私の口で「南無阿弥陀仏」と阿弥陀さまのお名前を呼んでいることだと考えられています。

ところが、親鸞さまは、その逆で、お念仏とは阿弥陀さまの方から私を呼んでいてくださるよび声であるといわれます。

つまり、私の口を通して、阿弥陀さまが私によび掛けていて下さるのだとおっしゃるのです。

ここがまさに、名号が不可思議といわれる所以です。

私が称えているはずであるにもかかわらず、称えている私が阿弥陀さまからよばれているとは…。

とても大切なことなのですが、そう聞かされても、「えっ、それってどういうこと？」と、思わず頭をひねりたくなるような、なかなか分かりづらいところだといえます。

『無量寿経』というお経によれば、阿弥陀さまは「あなたを救いたい」、「あなたに寄り添いたい」と願われています。

その「願い」の届けられた「結果」が、私が今お念仏を申す姿そのものです。

もちろん阿弥陀さまを礼拝し、お念仏申すのはこの私に違いはありません。

ですが、お念仏は「私が称える」という私の意志を問題とするのではなく、お念仏そのものが、阿弥陀さまの願いの成就した結果であるといいただくことが大切なのです。

不可思議とは「思議すべからず」

つまり、「頭で理解しようとしてはならない」、言い換えると「自分には理解できないということを理解せよ」ということです。

したがって、不可思議は不可思議のままに、阿弥陀さまの側から願われていた私であったことに素直に頷き、そのお慈悲の心に触れさせていただきたいものです。

私たちは、自分が掛けている願いについては、しつこいくらいとてもよく知っているものですが、その一方自分に掛けられている願いについては、なかなか自ら気付くということは難しいようです。

例えば、私たちはそれぞれに名前を持っていますが、その私の名前とは単に他の人と区別するための記号の役割だけではなく、私に対する親の願いが込められたものです。

ところが、日頃そのことに深く頷いているかということ、殆どの場合誰かに呼ばれたら返事をするだけのことで、その願いについては特に気にもとめていないというのが正直なところなのです。

さて、親鸞聖人が「真実の教」と示される「仏説無量寿経」によれば、南無阿弥陀仏という仏さまは、菩薩であられた時の名を法蔵といい、世自在王仏のもとで修行をなさった時に四十八の願いを立てられ、その全てを成就されて仏に成られたと説かれています。

その中の第十八番目に誓われた願いが特に重要で、そこでは「わたしが仏になったとき、あらゆる人々がまことの心で信じ喜び、わたしの国に生まれると思って、たとえば十声念仏して、もし生まれることができないようなら、わたしは決してさとりを開くまい。

ただし、五逆の罪を犯したり、正しい法を謗るものだけは除かれる」と誓われています。

このことを親鸞聖人は、いま私が称えている「南無阿弥陀仏」という念仏の声は、私が自らの力によって称えているのではなく、実は阿弥陀如来がこの私の上にはたらいて「念仏せよ、救う！」と、私をよんで下さるよび声なのであると教えておられます。

ところが、私たちは子どもの頃から教育によって科学的なものの見方をすることを刷り込まれてい

ますので、私の口から出ている念仏の声が、阿弥陀仏そのものであると理解することは到底出来ません。ましてや、南無阿弥陀仏が、「念仏せよ、救う！」という阿弥陀如来の願いのはたらきそのものであると理解することはきわめて困難だと思われ

ます。けれども、阿弥陀如来は、私たちが理解してもしなくても、見捨てることなく常に照らし続け、迷いのいのちを生きる私たちを仏に成らしめることを願い、この私の念仏の声にまでなって、「念仏せよ、救う！」と、よび続けていて下さいます。

天国と浄土は違うのですか？

人は死んだら天国へ行くのだと思っていました。

しかし、祖母は「死んだら天国ではなく、お浄土へかえるんだよ」と言っていました。

天国と浄土は違うのですか？

浄土はどんなところなんですか？（16歳・男性）

答 お葬式に行くと、亡くなったかたの友人がお別れの言葉を読まれるのを聞く機会がよくあります。

近頃はその時「天国で幸せに暮らしてください」などとおっしゃられることが多いように感じます。

またテレビや新聞などでもこの言葉によく出会います。

すっかり日本人が「死んでから行くところ」は、「天国」という名前になってしまったようです。

もともとこの「天国」という言葉は、英語でいう「heaven」の訳語であって、キリスト教の神の世界を意味します。

一方仏教では仏のまします世界を「浄土」と呼びます。

とくに真宗の教えでは阿弥陀如来が本願によって建立された国を「浄土」といい、あるいは「極楽」ともいうのです。

ですからあなたのおばあさんのおっしゃるとおり、真宗門徒であるならば、「死んだらお浄土へ還る」が正しいのです。

また、仏教でいう「天国」とは、文字どおり「天が住まう国」という意味です。

天とは、神様のことです。

仏教が発展する中で、インドのヒンドゥーの神々が入り入れられ、仏教を守護する天となりました。

帝釈天や弁財天などが有名ですね。

しかしこの「天国」は、神話の中で神々が争ったり、憎しみあつたりする場面がたくさん書かれてあるとおり、あくまで煩惱にとらわれた世界です。

神様ですから特別な力があつたりしますが、しかしそれでも苦しみ、救いを求める存在なのです。

それに対して「浄土」は、そういった悩み苦しみから完全に解放された世界のことを指します。

ですから冒頭にあげたように、仏式のお葬式で「天国」という言葉を使ってしまうと、その亡き人はまだ助かることができずに、煩惱にとらわれた世界を流転し、さまよっているということになってしまいます。

それではそういう呼び方の違い、言葉の意味の違いだけなのでしょうか。

じつはもうひとつ、「浄土」と「天国」には大きな違いがあります。

それは「浄土」とは場所の名であるばかりではなく「はたらき」をあらわす言葉だということです。おばあさんが、「死んだらお浄土へ還る」と教えてくださったそのお言葉によって、あなたの上に問いが生まれました。

このおばあさんのお言葉がなければ、あなたがこのような疑問を持つこともなかったでしょう。これはたいへん尊いことだと私は思います。

なぜならば、その時、真宗のみ教えをいっばいに聞いてこられたおばあさんを通して、阿弥陀仏のところがあなたに届いたからです。

なかなか気づくことは難しいけれども、確かにはたらきかけてくださったのです。これこそが浄土のはたらきなのです。

浄土や極楽などと言うと、「そんなところは死んだ人が行くところで、まだ若く元気な私には関係がない」と思われるかもしれませんが、そうではありません。

今生きているこの私にこそ、はたらいてくださるのが「浄土」なのです。

キリスト教の神は天地創造であり、唯一絶対の神です。

本来、如来は色も形も存在しないのですが、多くの人々救いに導くための方便として阿弥陀仏という姿を現している。

唯一神、絶対神ではない。

「方便」 小野 蓮明

「嘘も方便」ということがある。

嘘はよいはずがないが、物事を円満におさめ、迷いからめざめさせるために、時には必要な場合もある、というほどの意味であろうか。

「方便」はウパーヤの訳で、近づく、到達する、巧みなてだて、便宜的な手段や方法という意味をもつ。

仏が衆生をさとりに導くためのてだてとして説かれた教えの意味で、真実に裏づけられた、仏の衆生教化の方法・はたらきをいう。

人間ひとりひとりの機根、すなわち性質や能力は、けっして一様ではない。

人それぞれの機根にしたがって、教え導く仏のすぐれた智を、方便智といい、そのはたらきを善巧（ぜんぎょう）方便という。

仏教では、方便は虚言ではなく、あらゆる人をさとりに導くすぐれた教化の方法であり、仏のもっとも具体的なはたらきである。

あらゆる手段をめぐらして、人びとを真実の仏道に引き入れることを、方便引入といい、また真実の道に導入するために設けられた教えを、方便仮門というのである。

方便にはさらに、すべての形や相を超えた究極的な真理であるダルマ（法）が、人びとを救うために自ら形相をとって、はたらきでるすがたを意味する場合がある。

親鸞聖人は『一念多念文意』で、

「方便ともうすは、かたちをあらわし、御（み）な（名）をしめして衆生にしらしめたまうをもうすなり。すなわち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり」といっている。

方便は、真実に対する仮を意味するのみでなく、真実そのものはたらきである。

阿弥陀仏も、南無阿弥陀仏も、われらを如来の真実界にあらしめようとはたらく、方便法身、すなわち具体的な相として顕された仏そのものである。

方便は、世間にはたらく仏の智慧であり、無明を破って、光の世界にあらしめる智慧のはたらきである。

仏の大悲方便のはたらきに喚びさまされて、真実の世界に、しっかりと眼を開いて生きるものとなり

たいものである。

方便というは嘘も方便といって方便イコール嘘と思ってらっしゃる方もいると思います。方便とは大事な仏語で真実に導く手立てという意味で使われます。

浄土真宗のご本尊阿弥陀如来さまを方便法身といいます。

私たちがこの目にしている阿弥陀さまです。姿形となって私たちの前に現れてくださいました。その大本は真実の法といいます。真実とは色もなく形もましまさず言葉も絶えたりといわれます。人間のこの目で見えない、考えることも思うこともできないとなると何かよくわかりませんね。そこで阿弥陀さまは真実の世界から姿形を現わしてくださったというのです。真実真如の世界から来生してくださったということで仏さまのことを如来といいます。

私たちがこの目で見ている阿弥陀さまです。スーッとお立ちの仏さまです。お顔も私たち人間に似てますね。手のお姿もあります。まさに私たち人間と同じような姿となって現れてくださったのは私たちにこの阿弥陀の真実に気づいてほしい真実を知ってほしいという願いからなのです。

そして今皆さん阿弥陀さまの方を向いていますね。これは姿形があるから向けるのです。

真実といたり空といたり、どこに向いてお礼をしていいのかわからないのではなくこちらを向いてわが名を呼んでくれよお念仏申してお礼をしてくれよという

阿弥陀さまのお心おはたらきが方便法身というかたちになって私たちの前にスーッと姿を現して下さってあるのです。

皆さんのお家のお仏壇の阿弥陀さまもそうです。お仏壇に阿弥陀さまがましますからお家の方が一堂に御仏前に座ってみんな一緒に手を合わせナンマンダブツとお念仏を申すことができるのです。

そこまで私たちのことを思い、南無阿弥陀仏の救いの法を聞いてくれよ信じてくれよお念仏申してお浄土に生まれてくれよと大きな願いを方便法身のおすがたとなつてずっと立ちっ放しで私たちを喚んでくださってあるのです。

言葉で苦しむ人間

親鸞聖人がいらっしゃった当時、「南無阿弥陀仏」とお念仏しながら、「帰命尽十方無礙光如来」ともお称(とな)えしている人がいたそうです。

お念仏といえば「南無阿弥陀仏」ですから、聞きなじみのない言葉が気になって、「そんなお念仏は間違いじゃ。気取って「無礙光如来、などと称えおってからに！」と言う人もいたようです。

このことについて、親鸞聖人はお手紙の中で、次のように述べておられます。

「南無阿弥陀仏をとなへてのうへに、無礙光仏と申さんはあしきことなりと候ふなるこそ、きはまれる御ひがごとときこえ候へ。帰命は南無なり。無礙光仏は光明なり、智慧なり。この智慧はすなはち阿弥陀仏なり。阿弥陀仏の御かたちをしらせたまはねば、その御かたちをたしかにたしかにしらせまゐらせんとて、世親菩薩(天親)御ちからを尽してあらはしたまへるなり」

ここで聖人は、「帰命尽十方無礙光如来」とお称えするのは間違い、というほうが間違い、といわれています。いったい、どういうお心なのでしょう。

私たち人間は「言葉」によって物事を分別し、互いにくらべあつて生きています。その先にあるのは、「苦しみ」です。ですが、そうとわかっていながら、「言葉」の中でしか生きられないのもまた、人間

です。阿弥陀さまは「言葉」で苦しむ私たちのために、「言葉」の仏さまとなってくださったのでしょう。

その「御かたち」こそ「南無阿弥陀仏」であり、そのおすがたを私たちにわかりやすく知らせようと天親菩薩が力を尽くしてあらわされたのが「帰命尽十方無礙光如来」だったのです。

ですから、言葉は違って心は一つ、どちらの「御かたち」も「必ずあなたを救う。私にまかせておくれ」という、阿弥陀さまのよび声にほかなりません。このよび声だけは唯一、私たちを救う真実の「言葉」です。

故 瀬戸内寂聴さんは、かつて、「今の時代、目に見えないものを信じる事が出来なくなったのは、とても、不幸な時代だと思います」とおっしゃっていました。

人生の、さまざまな場面で、仏様が守ってくれたな、導いて下さったなと思える瞬間があると思います。その時は、自分が頑張ったからと自分の手柄にせず、仏様に感謝して頂きたいと思います。

自分の生死は、思い通りにはなりません。

しかし、今、生きているということは、この世に、まだ、自分の御用、役目があるということです。

私たちには、ただいまと帰れば、おかえりと言って迎えてくれる心のふるさと、阿弥陀様の御浄土があります。

亡き方と浄土で再会されたら、そのときに、うれしかったこと、悲しかったことなど、土産話をして、奥さんや、旦那さん、お母さん、お父さんに、子供さんには、沢山、話をしてあげてください。

お釈迦様は、人生は、苦の連続だと説いています。

その苦しみからどうした救われるのか、逃げてダメです。物事を正しく見て、正しく考え、正しく行い、正しい心を定めれば、苦しみは、自ずと消滅すると説かれました。

これが、仏教の根本原理です。

ところが、私たちは、世の中を、正しく見る事が出来ないのです。

例えば、「人は、必ず死ぬ」これは、誰でも、疑いようのない真実です。これを、正しく見る事が出来れば、苦しむことはありません。

しかし、私たちは、死ぬのは嫌だ、自分だけは、死にたくないと思います。

そこに、苦しみが生じるのです。

仏教より、学ぶことは「苦しみを、人のせいにはしてはいけない」。

あいつが悪い、こいつが悪い、先祖が悪い、方角が悪い、日が悪いなど、苦しみの源は、自分が物事を正しく見る事が出来ないためなのです。

また、「苦しみを避けようとしてはいけない」ということです。

人生は、あなたに不必要な苦しみを与えないのです。

不幸も災難も起こらない人生などありえません。無病息災を祈るよりも、そこから、何を学ぶかの方が重要です。

仏様は、いつも、あなたを守ってくれて、苦しみを乗り越えさせてくれます。

生きている者は、亡くなった方の分まで生きねばならない責任があります。

いつか、この世を卒業する時に、お互い「辛いことが多かったけど、生まれてきてよかった」といえる、後悔のない人生を送りたいものです。